会員交流委員会だより

第11回 aaca 愛知・飛騨高山・岐阜地区 建物視察会

会員交流委員会委員
日本建築美術工芸協会法人会員　松隈　章

今回で第11回を数える建物視察会。私は2010年開催の第5回建物視察会からシニアディレクターを務めている。日本各地の建物とモノづくりの現場を訪ねるこの視察会は、①新しい建物だけではなく地域に根差した古建築や近代建築もコースに組み込み新旧の建物を視察すること、②個人で一度にはなかなか訪れることが難しい建物を巡ること、③単に有名な建物を視察するだけではなく出来る限り設計担当者や施設に深くかかわる方に現地で解説をして頂くこと、④アートなど「モノづくり」の現場もコースに入れること、などを基本コンセプトとしてきた。

昨年は11月11日（金）～12日（土）の1泊2日の日程で愛知県と岐阜県を二日間で一気に巡るコースとした。視察計画立案の最初に思いついたのが、以前から「仕事場と歓待の西洋室を観に来ないか?」と誘われていた左官職人の挟土秀平さんのこと。2016年の挟土秀平さんは、NHK大河ドラマ「真田丸」の題字制作でまさに時の人。さらに、飛騨高山と言えば一度は訪れたい重要文化財「吉島家」がある。幸いなことに数年前に東京でお会いして面識のあった当主の吉島休兵衛忠男さんもお元気とのこと。そして「モノづくり」の視点からは、飛騨高山で1974年の創設当初から、木という身近な素材を使い環境との共生を目指したモノづくりの実践を続けて来られた「オークビレッジ」の活動を取り上げることとし、旧知の上野英二社長に早々に連絡を取った。

近年竣工オープンした話題の建物として、2016年6月にオープンしたばかりでフジモリ建築として話題を集めている藤森照信さんの最新作「多治見モザイクタイルミュージアム」、そして昨年オープンした「MIZKAN MUSEUM」と「半田赤レンガ建物」の半田市にある二つの文化施設を選んだ。さらに、同じく昨年オープンして話題を集めている伊東豊雄さんの「みんなの森 ぎふメディアコスモス」を選び、近くに行くのであればと関西建築界の雄・武田五一が設計した近代建築で1907（明治40）年竣工の「名和昆虫博物館」を加えた。結果、今回も2日間に見どころをぎゅぎゅっと詰め込んだ欲張りなプランとなった。

建物視察会のスタート・ゴールはいずれもJR名古屋駅。11日朝、参加者34名を乗せた大型借切バスは快晴の名古屋駅前から一路半田市へ。「MIZKAN MUSEUM」では参加者の一人で設計を統括されたNTTファシリティーズの横田昌幸プリンシパルアーキテクトと榊原健館長にご案内頂いた。続いて「半田赤レンガ建物」では宮道利典館長にご案内頂いたが、2016年9月に地元出身の写真家村井修さんの写真展が開催され、写真展を終えたあとに急逝され、「半田赤レンガ建物」への再訪は個人的には村井さんの供養となった。再びバスに乗って、あっと驚く外観をした「多治見モザイクタイルミュージアム」へ。設計者の藤森照信さんのご配慮で、各務寛治館長と村山閑学芸員のお二人に新旧の美しいモザイクタイルの展示をご案内頂けた。そして、陽が落ちる頃に飛騨高山の「オークビレッジ」に到着。上野英二社長が出迎えてくれた。現会長の稲本正さんが1974年に創設以来、三つの理念「百年かかって育った木は百年使えるものに」「お椀から建物まで」「子ども一人、ドングリ一粒」を掲げてきた「モノづくり」について建築家である上野社長に建物と家具を中心にご説明頂いた。併設の木工製品のショップでは参加者がモノづくりの実物を手に取り買い求めていた。そして飛騨高山に宿泊した。

視察会二日目は左官の挟土秀平さんのご自宅へ。建物視察会では二日間で数多くの建物を視察するために十分な見学時間をとることができない。そうしたスケジュールの中、挟土さんからは「2時間の案内時間が取れないのならやらない」との返答があり、どうにか2時間を確保し「ご自宅」「仕事場」さらに非公開の「歓待の西洋室」の3箇所を熱意溢れる雄弁な語りでじっくりと案内して頂くことが出来た。「技」「作品」の実物と挟土秀平さんの「熱い語り」に参加者一同感激。しかし一方で「地元には仕事が無いので東京に良く行っている」との言葉からは、「左官」と言う職人と「地方」での「モノづくり」のいずれもが極めて厳しい状況となっていることを感じた。

飛騨高山市内に移動して重要文化財「吉島家」へ。当主の吉島休兵衛忠男さんにご案内頂く。外国人を含む多くの観光客が来館しているものの年間の維持管理費用の捻出にご苦労されているとのこと。昼食は古民家を活用した「京や」にて飛騨牛を食した後、観光客で混雑する街並みを自由見学し一路岐阜へ。

岐阜市に近づく夕方になると渋滞に巻き込まれ、近代建築のひとつとして愉しみにしていた武田五一設計「名和昆虫博物館」の見学を断念。最後に伊東豊雄「みんなの森 ぎふメディアコスモス」を視察。家具デザイナーの藤江和子さんによる室内のランドスケープを想わせる空間デザインにより、居心地の良い暖かな図書館空間が広がっていた。土曜日の夕刻だったこともあり、多くの市民でにぎわいを見せていた。名古屋駅にはほぼ予定通りの時刻に到着し2日間に亘った建物視察会2016は天候にも恵まれ大きなトラブルもなく無事完了した。

「歓待の西洋室」（挟土秀平）の前庭にて

「天空からタイルの女神が ...」

モザイクタイル作家
日本建築美術工芸協会会員　松本 治子

―粘土山から生まれた多治見タイルモザイクミュージアム―

岐阜県の豊かな気候風土に育まれた多治見市はモザイクタイルの生産全国一のシェアを誇り、館内は江戸末期の煉瓦から現在までのタイルを集めたミュージアムです。

私は秋空の下、ミュージアムの前に立つと幼少時代にあった近所の砂屋さんに定期的に届く土山を見たときのわくわくと心弾む記憶が蘇り、多治見の土で覆われた建物の小さな入口に誘われ夢の見学が始まりました。

1階ロビーでは、タイルで侵食された自動車が待ち受けてくれます。一枚一枚タイルで貼り包まれた新たな中古車の不可思議な存在感は、当館のコンセルジュのようです。奥には世代を越えて楽しめるワークショップスペースがあり、豊富に用意されたタイル材料は、創る楽しさと魅力に溢れています。

―タイルの宝石箱―

2、3階のタイル展示を見て、4階展示室への階段を登っていきます。その途中の階段室は神聖な静寂さの中で、開口部からの外光の導きで招き入れてくれます。4階はタイルの宝石箱です。天窓からワイヤーカーテンが蜘蛛の巣状の筒で垂れ下がり、そこに絡まるモザイクタイルや陶片はあたかも輝く朝露のようです。天空からタイルの女神が光と共に降りてくる入口です。

多治見モザイクタイルミュージアム

銭湯絵タイル「松島の景」

と同時にミュージアムから、人間の手の温もりで出来たタイルが未来への輝きを翼にして、再び飛び立つような幻想的な空間です。

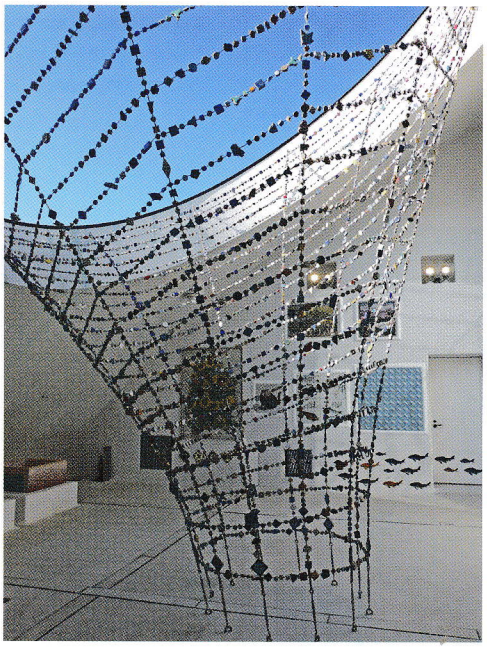
―建材になった陶器―

この4階で特に秀逸な作品は銭湯絵タイルです。銭湯絵タイルは人間が裸になり対峙する点で生活の営みに密着した絵画であるとも言えます。上質な土を捏ねて焼き、精緻な筆遣いで手描きの後、たっぷりと釉薬をかけて再度焼きあげ、色に深味を増して運ばれ、左官職人によって貼り上げられました。長年銭湯と共に昭和の成長期を支え、疲れを癒し和ませてくれました。

特に昭和5年頃の東京荒川区の桜湯絵タイル「松島の景」は淡陶社製(現在ダントー社)で淡路島の珉平焼を継承しているので、海の色の深く繊細な色幅と透明感が釉薬で一体となり焼き上げられています。丁寧に作らたれた作品は臨場感と共に蘇り、展示空間はまるでアルバムを眺めるような時空を越えて過去と現在が響き合います。

―タイルモザイクルネサンス―

タイルモザイクは平面でありつつも立体であるかのように、手の温もりの良いあんばいの曖昧さが独自の存在感になり、歴史上長く受け継がれている理由の一つになっていると思います。眺めていると、少し速すぎる現代の生活リズムを、ゆったりとリセットしてくれるように。このミュージアムは次世代のタイルの在り方を引き出す玉手箱のようなルネサンスミュージアムで、自然の偉大さと人間性回復を再確認させてくれる環境と建築空間のように思います。



4階展示室